



歪んだ自然との結びつき

哲学者 内山節さん

ひとしずく



かつての日本の人々は、みえてい
る世界の奥にみえない世界があると
考えていた。みえているのは現象の
世界であり、みえない世界に本質が
あるという考え方である。

たとえば「私」をみても、みえて
いるのは私の現象だけだ。背が高い
とか低いとか、どんな話し方をして
どんなことについてよく語るとか。

ところが「私」の本質は何かと問わ
ればよくわからない。誰も気づい
ていない本質があるかもしれないし、
私自身もまた自分の本質を知らない
のかもしれない。

自然の本質も同じことだ。暑い夏
が来たり嵐に襲われたりといった現
象は知っていても、自然の本質とは
何かと聞かれれば満足な答えを出せ

る人はまずいないだろう。自然の本
質もまたみえない世界だ。

妖怪や物の怪も、それがみえるか
たちで現れるなら現象の世界なので
ある。それは妖怪や物の怪の本質で
はない。

とするとすべてのものの本質はど
こにあるのだろうか。かつての人々
は、それは結び合う世界にあると考
えていた。私たちにはみえない、気
づかないだけで、すべてのものは奥
の方で結び合っている。自然も人間
も、最深部では結び合う存在をもっ
ていて、この共通の存在から現れて
きた現象が、ひとつひとつのもので
あり、私であったり、他の誰か、木
や草や動物であったりする。

だから奥にある結び合う世界が
「自然」であることを人々は願った。
自然とは「おのずから」ということ
であり、作為の入らない本来のもの





若い作家たちが自ら考案した妖怪グッズを出品する「妖怪アートフリマ モノノケ市」に人々が集う。その会場は、平安京を造営する際、陰陽道によって方位の厄災を解除する社として創建された「大將軍八神社」

という意味でもある。自然しぜんに真理の世界、それゆえに神仏の世界をみたといってもよい。

ところが人間たちの行いが、自然しぜんの結びつきをゆがめてしまうことがある。その結果古代の人たちが一番恐れたのは祟りたたりだった。たとえば奈良時代には御霊信仰みたまのまじりが広がったが、それは謀略などによって命を落とし、人が怨霊おんりょうとなつてこの世に祟るといふものである。菅原道真は祟り神としてあまりにも有名だが、人々は怨霊を鎮めるためにいろいろなことことをした。人間たちの誤つた行いが自然しぜんの結びつきをゆがめ、その結果怨霊が祟るといふ現象が生みだされたのである。だから人々は自然しぜんの結びつきを回復するために努力しなければならなかった。

おそらく妖怪や物の怪も、結びつきのゆがみから生まれてくるものなのだろう。ただし江戸時代になると、それをも生きたる世界の「友人」にしてしまう傾向も生まれた。絵画として妖怪が描かれ、カッパは少々悪さをする村の居住者になっていく。人々は結びつきのなかのゆがみも許容するようになり、それがいまに伝えられるようになった。

内山 節（うちやま たかし）

1950年（昭和25）東京生まれ。1970年代から東京と群馬県の山村・上野村との二重生活を続ける。NPO法人森づくりフォーラム代表理事。『日本人はなぜキツネにだまされなくなったのか』『貨幣の思想史』『「里」という思想』『新・幸福論—「近現代」の次に来るもの』『内山節著作集（全15巻）』など著書多数。